

【論文 23】

原始仏教聖典にみる釈尊と仏弟子たちの一日

森 章司

はじめに

[1] この「原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究」というプロジェクト研究は、筆者が他の研究者数人に手伝ってもらいながら、中央学術研究所の援助のもとに20年近くもの長きにわたって進めてきたものである。

このプロジェクト研究のテーマを簡単に言えば、原始仏教聖典を資料として釈尊の成道から入滅までの活動のすべてを伝記としてまとめることである。現在われわれが持っている釈迦仏教のパーリと漢訳の経蔵と律蔵すなわち原始仏教聖典は、その中に護教的な粉飾が紛れ込んでいる可能性も否定できないが、基本姿勢としては釈尊の言行録を記そうとしたものであって、したがってそこにはそれを編集した人たちが持っていたであろうこれら文献の主人公たる釈尊の生涯イメージと釈尊教団形成史イメージが塗りこめられていることは間違いがないであろう。われわれの研究テーマはこのような認識のもとに、原始仏教聖典からこの2つのイメージを探り出し、それを年代記的に編成し直す作業と言い換えることができる。

しかしながらそこには、解決しようがないと思わせるような難問題が横たわっている。仮にこれらすべてが釈尊の生涯の言行録であるとしても、原始仏教聖典は、いわば日付の部分がすべて失われ、しかも順序不同にバラバラになってしまっている言行録のようなもので、釈尊や教団史上の事績に関する断片が時系列にはお構いなしに、何の脈絡もなく寄せ集められているにすぎない。したがって原始仏教聖典は、1つ1つの事績の年次を特定することはおろか、それらを時系列に従って並べ替えることをも拒否している。

しかも教えの内容については繰り返し繰り返し詳しく記述されているが、歴史的な事実関係についてはごく簡単に記されるのみであって、編集者たちははなからそのディテールを描写しようという気持ちはなかったと言わざるをえない。要するに原始仏教聖典の編集者たちには、年代記的な関心がまったくなかったとさえ考えざるをえないのである。

たとえば原始仏教聖典には「時に世尊は王舎城から舎衛城まで遊行された」などという記述が随所に見いだされる。それはいずれかの年のいずれかの季節のことで、いくつかあった幹線道路のいずれかを通り、ある一定の期間を要したであろうことは言うまでもないが、しかしながらこのような事柄については、何の情報も与えてくれていない。したがって原始仏教聖典から年代記的な情報を探し出すというのはまことに難しいのである。

しかしながら原始仏教聖典にも年代記的な歴史描写が顔を出すケースがないではない。その乏しい例の1つは律蔵の「受戒犍度」であり、もう1つは経蔵の「涅槃経」である。これらにはいずれも遊行の記述があるが、それが何年のいつの季節のことで、どのようなルートを取り、何日間くらいを要したであろうということが、想像できる程度には記述されている。しかし実はこれらは成道直後と入滅直前という、たまたま紛れがない時期のことが主題になっ

ており、前者は成道直後にサンガがどのように形成されたかということ述べようとしたものであるから、ある程度は年代記的な叙述がなされているのであり、後者は入滅に際して釈尊が、その最後の旅の折節にサンガに対してどのような遺言を残されたかということ記録したものであるから、結果的に年代記的な叙述となっているにすぎないのである。そこで仏伝經典と呼ばれるものをはじめとして、古今東西の仏教学者が書いてきた釈尊の伝記は、この2つの聖典をネタのすべてとしているといっても過言ではなく、したがってこの2つを取り去ってしまうと、後にはほとんど何も残らないということになるのである。

しかしこれは反面では、原始仏教聖典の編集者たちが歴史上の釈尊の言行録を記録しようという姿勢がなかったわけではないということを示唆するものであって、もし原始仏教聖典全体の中に秘められている年代記的な情報を注意深く拾い上げることができれば、釈尊の生涯を再構築することも不可能ではないということを示唆している。

[2] しかしながら従来は釈尊伝研究においては、それら断片的な事績の記述の底に存在するかすかな情報を読み取ろうとせず、また日付の失われた断片的な記述を一本の線にするという試みを放棄してきたといえるであろう。換言すれば、事績と事績の間をつなぐ、簡略化され省略されてしまっている事実関係の背後を読み解こうとする努力を怠ってきたので、これら断片的な記述のなかから、その年代や季節や月日の経過を読み解く手掛かりを見いだせなかったということである。端的に言えば「時に世尊は王舎城から舎衛城まで遊行された」という記述について、それが何年頃の、どの季節で、何日くらいを要したかということ推測することができなかつたのである。

はたしてそのようなことは可能なのであろうか。実はここにはかなりたくさんの手掛かりが残されているのである。たとえば律蔵にはその間は遊行してはならない雨安居などの年間行事と、それにはいつ入って、いつごろなら出ることができるという諸々の規定があるのであるから、釈尊や仏弟子たちが遊行された季節は自ずからに限定されてくる。また王舎城から舎衛城まで遊行するのにどれくらいの日数を要したかということについては、その遊行ルートと交通手段や、1日のうちで遊行にかけられる時間などがわかれば1日の平均移動距離が判るから、それで総距離を割れば、簡単に計算できる。要するに釈尊や仏弟子たちの行動パターンが判ってくれば、バラバラになってしまっている事績を時系列でつなぐことも不可能ではないということである。

そのパターンとは次のようなものである。

- ① 釈尊は雨安居の前と後に全国から釈尊のところに集まってくる仏弟子たちを待つ必要があったから、仏教中国を離れたところで雨安居をされるということはなかった。
- ② また雨安居の前と後のそのような慣習があったから、その年に雨安居される土地には9ヵ月ほど続けて滞在された。
- ③ 残された3ヵ月の遊行期間の遊行の1日の移動距離は平均して10キロメートルほどであり、したがって1回の遊行での最大の移動距離は900キロメートルとなる。王舎城と舎衛城間はガンジス河沿いの南道ルートでも、ヴェーサーリー周りの北道ルートでも約600キロメートルであるから、同じ年のうちにこの間を往復されるということはない。

④釈尊はヴァンサ国やアンガ国、あるいはスーラセーナ国やクル国など仏教中国でも比較的辺境の地に行かれたことがあったが、その前後には同じ方角の土地で雨安居を過ごされた。たとえば東のアンガ国を訪れられた次の年に、一足飛びに西の果てのスーラセーナ国まで旅をされるなどということはありませんでした。

簡単に言えば、釈尊は一生をガンジス河の中流域で、この河の流れのようにゆったりと過ごされたのであって、忙しく東奔西走するというようなことはなかったということである。

いっぽう布薩や雨安居などの制度やサンガの運営規定、あるいは出家修行者の生活規定などはいわば法律であって、法律は体系的に組み上げられていなければならないものである。いわば土台の上に基礎を築き、基礎の上にまず柱や梁を建て、その後で壁や屋根を作るといようにして構築されるから、土台や柱がなくして屋根や壁が築かれるということはありません。すなわちサンガ形成史に係わる事績の前後関係は比較的推定しやすい。

その上で、たとえば竹林精舎の建設年や阿難の秘書室長就任年、あるいは比丘尼の誕生年、提婆達多の破僧年などを研究して、この年代を上記のような状況的証拠によって得られた時系列と重ね合わせてみれば、今まで霧の底に沈み込んでいた釈尊の生涯の輪郭は見えてくる。これがわれわれのとってきた方法論である。

ところで前述した、釈尊の1年間の生活周期や遊行の交通手段やルート、あるいは釈尊教団の形成史や制度成立史などについては、すでにこのプロジェクト研究の研究成果のみを発表する『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究』と称する「モノグラフ」全16冊を中心にいくつもの論文や資料集を公表してきた。そしてこのような方法論と研究成果をもとにして、いまだ公刊はしていないけれども「釈尊および釈尊教団史年表」をまとめ、また「釈尊年齢にしたがって配列した原始仏教聖典目録」も編集したのである。

[3] これから本論文に記そうとするのは釈尊や仏弟子たちの1日はどのようなものであったかということである。その結論はすでにかなり以前から筆者の頭ではまとまっており、それをもとにしていくつもの論文をも執筆し、また「年表」や「聖典目録」などを作成する作業も行ってきたのであるが、詳しい資料や結論に至った筋道などを発表したことはなかった。そこで順序は逆になったが、ここにそれを公にして、学界諸兄のご教示とご批判をまちたいというのが、本稿執筆の因縁である。

[4] 本論文は釈尊と出家の仏弟子たちすなわち比丘と比丘尼（原則として比丘に代表させている）の1日を、目次に示したような順序で考察する。まず律蔵の規定から主に仏弟子たちの1日を検討する。律蔵の波羅提木叉の部分は、その生活において踏み外してはならない最低限度を定めたものであって、必ずしも原始仏教時代の仏弟子の生活実態を示しているとはいえないが、韃度部の部分には一人一人の比丘や比丘尼の生活がいかにあるべきかというモラル的なものが含まれ、しかもそれは細部にわたっているから重要な資料となりうる。

次に経蔵の教えからそれを検討する。これは仏弟子たちのあるべき理想的な生活を理念的に示したものであり、仏弟子のすべてが理想的な生活をしていたということではないであろうから、これもただちに仏弟子たちの生活実態を示したものとすることはできない。しかし

ながらそれが絵に描いた餅にとどまるならばともかく、仏弟子たちがそのような生活をめざして日々修行していたとするなら、これもまたきちんと把握しておかなければならない。

そして本稿は、以上のような律蔵の規定と経蔵の教えるところを参考にしつつ、原始仏教聖典に描かれている釈尊と仏弟子たちの1日の生活を調査する。とはいいいながら律蔵はむしろ特異ケースが取り上げられていることが多いから、原始仏教聖典の中でも経蔵が描く、釈尊や仏弟子たちのさりげない日常生活を調査することが中心となる。経蔵とて文学のように仏弟子たちの「あるがまま」を客観的に描こうとするものではないから、自ずから限界はあるが、筆者の今のテーマからすれば、このような方法をとらざるをえない。